埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Warning against `Drunkness' in the Tudor Interlude

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 米村, 泰明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/626

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

チューダー・インタールードに描かれる酩酊の戒め

Warning against ‘Drunkness’ in the Tudor Interlude

米　村　泰　明
YONEMURA, Yasuaki

はじめに

中後期のインタールードにおいては、舞台上で断罪される悪徳が、社会的、経済的、さらには政治的な視点から描かれている。いいかえれば、初期道徳劇のようにキリスト教的価値観が定義する七罪源のアレゴリーに終わらせるのではなく、同時代的な社会的メッセージに絡める作業を劇作家が行っていると言えるだろう。七罪源のひとつに「貪食」(Gluttony)がある。登場人物としては「大食」(Gula) あるいは「不節制」(Incontinence) という名称でも登場する。この「貪食」という登場人物が、初期道徳劇ではキリスト教的価値観を具現化しただけの存在だったのに対して、中後期においては、「貪食」という社会的罪悪が、どのように個人の生活のみならず、社会全体に対する害悪となっているかを示唆するようになっている。「人間」や「万人」という主人公の、現世における人生という旅路の中での神との関係における「魂の争奪戦」では考慮されなかった、あるいは考慮する必要が無かった、「社会」という人間が作る世界の中での悪徳の及ぼす影響力が変化していることを意識していたのだろう。

「貪食」の属性のひとつに「過度の飲酒」がある。「過度の飲酒」は、当時の社会においてキリスト教的な観点からも批判されていただけでなく、現実の社会に悪影響を及ぼすという点からもその重要性が指摘されていた問題であった。本論では、「過度の飲酒」という社会の悪弊が聖職者や社会改革者の文筆、さらには中後期インタールードのテーマとして扱われている様相を探る。

Chaucer と Langland

「貪食」は「七罪源」(Seven Deadly Sins) と呼ばれる罪のひとつである。(他の六つは「傲慢 (pride)」、「強欲」(avarice)、「色欲」(lust)、「怠惰」(sloth)、「嫉妬」(envy)、「憤怒」(anger)) これらはいずれもその罪を犯したものを永遠の死に追いやる大罪とされている。

Geoffrey Chaucerの『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) では、教区司祭が七罪源に関する説教を行っている。この「教区司祭の話」は未完に終わった同書の最後のエピソードになっている。『カンタベリー物語』に登場する聖職者は、尼僧院長、第二の尼僧、三人の僧侶、修道僧、托鉢僧、教区司祭である。尼僧院長、修道僧、そして托鉢僧と、チョーサーは堕落した聖職者に対する厳しい批判を展開しているが、貧しいオックス

キーワード：道徳劇、チューダー・インタールード、貪食、酩酊
Key words ：Morality Plays, Tudor Interlude, Gluttony, Drunkness

フォードの学僧と教区司祭は、理想的なあり方として描かれている。その教区司祭の話は、他の巡礼たちが語る「物語」（fable）形式ではなく、まさに説教となっている。（「と申しますのも、『テモテへの手紙』を書いたパウロは、真実を捨てて、物語やそのような愚かなことを語る人たちを叱っていますから。」）彼はまず悔い改めについて語り、続いて七つの大罪を事細かに説明する。「高慢」、「妬み」、「怒り」、「怠惰」、「貪欲」に次いで「貪食」に関する説教が始まる。（翻訳は『カンタベリー物語』桝井迪夫訳、岩波文庫、2006年による）

「この罪は、アダムとイヴの罪によく示されているように、全世界を堕落させたのです。（中略）

この貪食の罪に耽っている者はいかなる罪にも抗することができません。なぜなら、彼が身を隠し休息を得ている場所は悪魔の倉だからです。この罪には多くの種類があります。最初のものは泥酔です。それは人間の理性の恐ろしい墓場です。そこで、人が酔いどれになると、彼は理性を失うのです。これは大罪であります。だが確かに、人が強い酒に慣れていなくて、おそらくは酒の力を知らないか、あるいは頭が弱いか、あるいはひどく働いてそのために一層酒を飲むような場合、突然に酔っぱらったとしても、それは決して大罪ではなく小罪です。第二の種類の貪食は人の精神がすっかりかき乱される場合です。なぜなら泥酔がその人から知恵の慎重な働きを奪うからです。第三の種類の貪食は人が食物を貪り食い、適度な食べ方を知らない場合です。第四の貪食は食物を非常に食べ過ぎて体液の調子が狂っている場合です。第五番目は極度の飲酒による忘却です。そのために時々人は、夕方にやったことや、あるいは前の晩にやったことを翌日の朝にはすっかり忘れています。」

アダムとイヴの罪を貪食に求める解釈は聖書注釈者たちの論争の一つであった。[1] 教区牧師は飲酒の害として、まず他の罪が引き起こす元凶となりうることを指摘している。また、体液の調子が狂ったり、記憶喪失にいたるという、神学的な面よりも健康面での害を挙げていることが興味深い。

この教区牧師が語る飲酒の弊害を具現化した存在がLanglandの「大食」だといえるだろう。*Pierce Plowman*のPassus V.での「大食」は、懺悔をする気になって教会に行こうとするが、途中で酒屋の女将に呼び止められて店に入りこんでしまう。「大食」は、酒屋に入り浸る近隣の多彩な職業の人びととエールを飲み続け、はては酔いつぶれただけでなくその後2日間も眠り続けてしまう。食事をとる描写はなく、「大食」はひたすらエールを飲み続けるのである。（翻訳は『農夫ピアースの夢』柴田忠作訳注、東海大学出版会、1981による）

「朝まだ早いころだというのにこの連中、大食を歓迎して上等のビール[2]をおごった」
「（商取引のゲームをしている連中は）さきに降りたほうが、立って、ビールを一ガロン大食卿に捧げねばならぬのだ」
「ついに、大食は、一ガロン四分の一パイントを飲みほした」（326-46行）

酔いつぶれて２日間眠り続け、目が覚めた「大食」は「悔悛」に責め立てられて懺悔の告白を始める。

「私は、数えきれぬほどしばしば罪深い言葉を口にしました。『神の魂にかけて』とか、『神よ、聖遺物よ、救い給え』などと、必要もないのに九百回も誓いの言葉を口にしました。また、夕食を、そしてときには昼食も食べすぎて、私、大食は、一マイルも歩かぬうちに吐き出しました。蓄えて、飢えた者に施すべき物をこうしてむだにしました。大斎日にも、節度なく飲み食いし、しばしば、長いこと食卓にいすわってだらしなく食べたり居眠りをしたりしました。居酒屋でしゃべっていたいばかりに余分に飲んだり、喰ったりし、大斎日でも、いそがせて昼まえに食事をしたりしました。」(375-84行)

この告白でも「貪食」の罪そのものだけでなく、そこから派生する罪（誓言、貧者への施しの拒絶、大斎日の暴飲暴食、怠惰）が列挙されている。

聖職者と社会改革者たちによる批判

チューダー朝の聖職者たちの飲酒に対する批判には、宗教的観点のみならず、社会的な視点も含まれていた。飲酒に耽るものは改悛しなければ地獄に堕ちる、という警告は宗教的観点からのものであるが、同時に飲酒による健康への害も視野に入っていた。Richard L. Greavesによると、英国国教会とピューリタンでは、飲酒に対する態度が違っていた。国教会はワインの利点（適度に用いればよく眠れ、頭の回転が速くなり、元気になり、リラックスさせ、体色が良くなり体力がつき、視力が向上し、胃が丈夫になり、利尿作用もある）を認めていた。ただし、飲み過ぎはさまざまな健康上の害となると指摘していた（痛風、肋膜炎、むくみ、不妊、女性は容色が衰える、記憶力、肉体的活動力の減退、など）。ひいては結婚生活の妨げになるとの指摘もあった。これらの社会的側面に加えて、霊的問題があった。それに対してピューリタンは、霊的問題に力点を置き、飲酒を堕地獄の罪であるととらえていた。(3)

犯罪や社会紊乱を引き起こす元凶としての側面も危険視されていた。この場合には飲酒単独ではなく、ほかの悪徳行為との組み合わせが問題となっていた。特に売春や暴力との組み合わせである。(4) さらに、飲酒が貧困の引き金になることが指摘されている。1597年に出版されたHenry Arth の‘Provision for the Poore’（*Tudor Economic Documents*, ed., R.H. Tawney, London, 1953, vol.III, 444-58.）は貧困を罪に対する神の裁きであると規定し、その上で、その罪には貧乏人自身から生じるものと、貧困の原因となるものからもたらされるものがあり、後者に過度の飲食を含めている。一人の人間が２、３人分の飲食物を腹に詰め込むと、穀物などが不足し、貧乏人が窮地に陥るという論理である。

政府は過度の飲酒を社会の安定に対する重大な脅威であるととらえ、16世紀半ば以降繰り返し飲酒を規制する法案を議会に提出したが、ことごとく日の目を見なかった。規制が地主階級に及ぶことを懸念してのことだったようだが、その一方で飲酒可能な曜日、時間、人数制限を設けるなど、厳しい規制を設ける地域もあった。(Greaves, pp.486-87)

次に、社会改革者を任ずる著作家による飲酒に対する警告を見ていこう。チューダー朝を代表的する著作としては、Phillip Stubbsの『悪弊の解剖』(*The Anatomie of Abuses*)(5) があげられる。ピューリタン的立場から当時の社会に見られる悪弊を糾弾するこの著作で

は、過度の飲酒を獣よりも劣る行為と見なしている。外国旅行をした見聞から、イングランドを示す「エイルグナ」における悪弊の蔓延を批判するフィロポヌスは、飲酒の害を次のように列挙する。（訳は筆者による）

「酔っぱらっているときにしたことを、しらふになったら思い出せない。酔っぱらって友人を殺し、愛する人を嫌悪し、秘密を暴露し、人を人とも思わない。神への畏れ、友人や親族への愛、誠実さや礼儀ただしさ、人情を放逐してしまう。だから、酔っぱらいを獣と呼ぶことを恐れない。人間ではない、獣よりも質が悪い。というのは獣は食欲の過剰、不必要を越えはしないからだ。獣は必要な分量の食欲を満たすのみだ。それこそ神が我々にしてもらいたいと思っていることなのだ。」

著者の代弁者であるフィロポヌスは飲酒が人間関係に与える悪影響から論じ始めるが、根底にあるのは、それが非キリスト教徒的な振る舞いだという気持ちである。聞き手であるスピューデウスに、過度の飲酒を悪弊とする根拠を求めさせるのは、聖書からの引用を導きだすためである。いくつか例を見てみよう。（聖書からの引用は、日本聖書協会1987年版の新共同訳による）

「災いだ、朝早くから濃い酒をあおり　夜更けまで酒に身を焼かれる者は。（中略）それゆえ、陰府は喉を広げ　その口をどこまでも開く。高貴な者も群衆も騒ぎの音も喜びの声も、そこに落ち込む。」『イザヤ書』5:11-14
「ぶどう酒と新しい酒は心を奪う。」『ホセア書』4:11
「酔いしれる者よ、目を覚ませ、泣け。酒におぼれる者よ、皆泣き叫べ。泡立つ酒はお前たちの口から断たれた。」『ヨエル書』1:5
「災いだ　　自分の隣人に怒りの熱を加えた酒を飲ませ　酔わせて、その裸を見ようとする者は。」『ハバクク書』2:15
「酒は不遜、強い酒は騒ぎ。酔う者が知恵を得ることはない。」『箴言』20:1
「大酒を飲むな、身を持ち崩すな。大酒を飲み、身を持ち崩す者は貧乏になり惰眠をむさぼる者はぼろをまとう。」『箴言』23:20-21
「不幸な者は誰か、嘆かわしい者は誰か　いさかいの絶えぬ者は誰か、愚痴を言う者は誰か　理由なく傷だらけになっているのは誰か濁った目をしているのは誰か。それは、酒を飲んで夜更かしする者。　混ぜ合わせた酒に深入りする者。酒を見つめるな。酒は赤く杯の中で輝き、滑らかに喉を下るが　後になると、それは蛇のようにかみ　蝮の毒のように広がる。」『箴言』23:29-32

新約聖書からの引用もある。

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる。」『ルカによる福音書』21:34
「酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。」『エフェソの信徒への手紙』5:18

フィロポヌスはほかにも様々な人間の振る舞いを悪弊と断じているが、その根拠となるのは聖書の記述である。ピューリタン的思想傾向のあった著者のみならず、同時代の読者たちにとって、あらゆる事柄の正邪を含む判断の根拠は聖書に求められていたのである。(6)

フィロポヌスは、上記の例に続いて、次のように言う。

「酩酊は神に対する罪であり、現世で以上のような悪徳をもたらすのだから、避けねばならない。酔っぱらいは皆、狂乱状態に陥った者のように自分を見失い、健全な知恵の持ち主とは言えず、ベドラムの気違いより悪い、キリスト教徒ではなく、反キリスト教徒だ。イエスに従う者ではなくサタンに従う悪魔の手足だ。だから我々は神の名においてすべての過剰をさけ、中庸と節酒を奉じ、自然の要求に応えるだけの食事と酒をとり、肉の欲望が求める飽くことのない食欲に屈してはならないのだ。神のご加護がなければ、我々の体内に入った食物も飲み物も肉体を養う力を与えられず、五体もそれぞれの義務を果たす力を与えられず、ただ胃袋に溜まり、悪臭を発し、ゴミ溜の汚らしい肉のように腐っていくのだ。神の良き被造物である我々をばか騒ぎや深酒や過剰などの悪弊から遠ざけるために、パンや飲み物を口にする前に必ず神に感謝しなければならない。イエスは食前食後に必ず祈りを捧げたと書いてあるのだから。」

そして、飲酒によって恥ずべき目にあった人物を列挙するが、その中に旧約聖書「創世記」から二人の娘と肉体関係を持ったロトと、息子に裸を見られたノア、旧約聖書外典「ユデト書」から、酔っぱらって敵国の未亡人ユデトに寝首をかかれたホロフェルネスの名が挙げられている。これら三人は、聖書や古典籍に登場する著名な人物たちの飲酒にまつわるエピソードをまとめた、作者不詳の『９人の飲んだくれ』（*A Treatyse Called The IX Drunkardes*. 1523年）でも扱われている。(7)『悪弊の解剖』でも触れられている３人に限定してエピソードを紹介する。

まず紹介されるのはノアである。『創世記』第６章に記述されている箱舟の建造と四十日四十夜降り続いた雨、そして洪水を生き延びたノアは箱舟を降り、畑を耕す者となった。『９人の飲んだくれ』では、「ノアは如何にして息子のハムに嘲られたか」（How Noe was mocked of his sonne Cham）という見出しに続いて、第９章18節から28節のエピソードが語られる。

ぶどう畑を作ったノアは、あるときぶどう酒を飲んで酔っぱらい、天幕の中で裸で寝てしまう。『創世記』における該当箇所は以下のようになっている。

「カナンの父ハムは、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。（酔いからさめたノアは、ハムの息子カナンを呪う）カナンは呪われよ　奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」（『創世記』9:18-28）

『９人の飲んだくれ』では、次のように記述されている。

And as Cham sawe his fader lying so nakyd Cham went out to his brytherne & sayde to them i derysyon. my fader lyeth with in all nakyd. That seyng Sem & Japheth toke a clothe & went backe ward turnynge a way theyr faces and couered the secrettes of theyr goode fader Noe. Whan Noe a woke from his slepe & knowyng what his sonne Cham dyd sayd cursed be Chanaan & he shal be seruaunt

of the seruauntes of his brytherne And yet lyued Noe after the deluuye or flowde .iii.C. &.l. yere. And this by drunkenes was Noe moched by his sone.

「そしてハムは父が裸で寝ているのを見ると、ハムは（テントの）外へ出て兄弟たちのところへ行き、彼らに「これはお笑いだ。父は素っ裸で寝ている」と告げた。それを見ると、セムとヤフェトは衣をとり、後ろ向きに、顔を背けて善良な父の秘部を覆った。眠りからさめて息子のハムがしたことを知ったとき、ノアは「カナンは呪われよ、兄たちの奴隷の奴隷となれ」と言った。ノアは洪水の後350年生きた。このように泥酔したためノアは息子に嘲られたのだ。」（訳および下線部は筆者による）

『９人の飲んだくれ』のハムは父親の裸を見たときに、兄たちに向かって'i derysyon'と語る。この台詞は聖書にはない、ハムが嘲笑ったという行為を付け加えている。(8) いわゆる「ノアの呪い」は、古来から様々な教父や聖書注釈者たちによって解釈されて来ているが、『９人の飲んだくれ』の著者は、「父親を嘲笑う息子」というきわめてわかりやすい動機を与えているといえるだろう。(9)『９人の飲んだくれ』の著者は、「この酩酊によってノアは息子により嘲られたのである」（by drunkenes was Noe moched by his sone）と締めくくる。

続いて、ロトの物語である。『創世記』第13章から19章を扱っている。ソドムの滅亡と、主の言いつけに背いて塩の柱になったロトの妻のエピソードに続く。ロトは二人の娘と山の中に住むことになり、娘たちは子種を受けるために父親にぶどう酒を飲ませる。『創世記』の該当箇所は以下の通りである。

「娘たちはその夜、父親にぶどう酒を飲ませ、姉がまず、父親のところへ入って寝た。父親は、娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった。」「娘たちはその夜もまた父親にぶどう酒を飲ませ、妹が父親のところへ行って寝た。父親は娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった。」（『創世記』19:33, 35）

『９人の飲んだくれ』は聖書の記述に忠実であり、最後を「このように酩酊したことによってロトはこの行為をなしたのである」（And thus by drunkynnes Loth dyd this dede.） と締めくくる。実際にはロトは酩酊して寝てしまい、自分から「この行為」を行ったのではないが、著者は酩酊したことが近親相姦を導いたことを批判しているのである。

カラバッジョなど数多の画家が描くホロフェルネスの首を斬るユデトのエピソードは、旧約聖書外典『ユデト書』に基づく。ネブカドネツァルの指揮官ホロフェルネスによって包囲されたベツリアのを救うべく、寡婦ユデトは美しく装い、ホロフェルネスの陣営に向かう。ユデトの美しさに魅了されたホロフェルネスは彼女を宴会に誘う。「ホロフェルネス彼（ユデト）によりていたく喜び、生まれしよりこのかた、いずれの日に飲みしよりも多くの酒を飲み」（12:20）酔いつぶれて寝てしまう。ユデトはホロフェルネスの首を斬り落とす。『ユデト書』に準拠した描写となっている。

「このように酩酊により地位高きホロフェルネスは下賤の輩のごとく斬り殺されたのである 」（ thus by drunnkynnes this prynce

Olyphernes lyke a wretche was slayn ）と締めくくられている。

以下、『創世記』第14章から、アブラハムの親族ロトを捕虜にしたケドルラオメル王が祝宴を張り、泥酔した折にアブラハムに斬り殺された話（ただし、『創世記』にはケドルラオメルが酔っていたという記述は無い）、『サムエル記下』第13章以降から、妹タマルを異母兄弟のアムノンに凌辱されたダビデの子アブサロムが、アムノンに酒を飲ませ酔っぱらったところを打ち殺させる話、『サムエル記上』第25章以降から、ナバルとアビガイルの話、『ダニエル書』からネブカドネツァルの息子ベルシャツァルの酒宴の最中に壁に書かれた文字の謎をダニエルが解き明かし、その解釈通りにベルシャツァルが殺害されてしまう話、旧約聖書外典『マカビー第一書』から二人の息子マタテアとユダをともなって、養子のプトレマイオスの宴会に呼ばれ、酔ったところをプトレマイオスに殺されるシモン・マカビオの話、そして、『列王記上』第16章からイスラエルの王バシャの息子エラが酒に酔っているときに家臣のジムリに撃ち殺されてしまう話が綴られている。[10]

９人のエピソードを語り終えると、読者への警告が続く。

Therfore euery parson take hede of hymselfe & exchew & kepe hym fro drunkynnes for therby hath many nobyl men be slayne.
「だから、皆様、気をつけて、飲酒を避け、近づかないようにしなさい。飲酒によって、多くの高貴な人物が命を落としたのですから。」

時代は下るが、17世紀初頭に活動したピューリタンの聖職者Samuel Ward（1577-1640）は、ロンドンで'Woe to Drunkards'と題する説教を行っている。[11] 記録によればこの説教は1622年、1624年、1627年の三回行われており、とりもなおさず飲酒という悪弊を根絶する困難さを証明していると言えるだろう。この説教において、Wardは次のように述べる。（訳は筆者による）

「酔っぱらいは風に揺れる木の先端のように、荒れ狂う波にもまれる船のマストのように、ふらふらしながら昼となく夜となくうろつき回り、規制も罰則も恐れることはない。傲慢の王は大酒飲みである。」

「酒を飲めば楽しくなると思い込んでいるが、一口でも、ましてや大量に飲めば、酒は嘆きと苦汁とニガヨモギと悲痛に変わるのだ。酒を飲めば仲間と仲良くなると言うが、酒は憤怒を起こさせるものであり、騒がしい喧嘩のもとである。」

「飲酒の結果、あらゆる種類の病気、虚弱体質、奇形、黄ばんだ白い顔色、中風、浮腫、頭痛に見舞われる。」

「酔っぱらいの気晴らしは、熱くなってワインでほかの連中を圧倒すること、相手を裸にすること、己の愚かさを誇ること。サタンとその罠の奴隷、餌食になってしまう。」

「しらふでまともな状態のときには信仰心があって、慎み深く、礼儀正しく秘密を守るように見える人が、酔っぱらうと誓言し、冒涜し、怒り狂い、人を殴り、口汚い言葉を吐き、秘密をべらべらしゃべり、愚かな行動をとり、相手が誰か、男か女かもわからなくなり、まったくサタンの手下になってしまう。」

Wardは酔っぱらいに対する神の怒り（と

彼が考えている）を20例ほどあげている。いくつか引用する。

・Kesgraveのエールハウスの女将。三人の客に帰る前にもう一杯飲んでいけと無理強いしようとしてジョッキを持って近づいていく途中で声が出なくなり、気分が悪くなり、舌がふくれあがって話ができなくなり、３日後に死亡。

・Bromeswellの粉屋。酔っぱらって帰宅するときに池で泳ぎたくなる。泳げないのを知っている女房と使用人が力ずくで水からあげるが、わざわざ再び水に入って溺れ死ぬ。

・Hasling-fieldの肉屋。飲酒を批判する牧師の説教を嘲りながらエールを飲んでいたら、何かが喉に詰まって窒息死した。

・Norfolke州のBungey。三人の男がエールハウスから帰る暗い夜道で、「地獄の半分も暗くはない」と誓言する。一人は橋から川に落ちて溺死。一人は馬から落ちて死亡。一人は川岸で眠りこけて凍死。

・Hadlyの執行吏。日曜日（Lord's Day）に酔っぱらって、「こいつに乗って悪魔のところまで行くぜ」と断言しながら雌ロバを走らせる。雌ロバは彼を振り落とし、首の骨を折ってしまう。

聖書からの引用だけにとどまらず、実際に起きた事件を列挙しているが、これが神の怒りであると言う確証はもちろんない。著者の「神の怒りに違いない」という確信あるいは願望であると言えるだろう。同時にこれほどまでに多くの実例を挙げねばならないということは、聖職者の警告をもってしても押しとどめきれない飲酒という快楽がいかに根強くはびこっていたかを証明しているのだ。

15世紀の道徳劇

初期道徳劇を代表する作者不詳の『堅忍の城』（*Castle of Perseverance*, c.1400-25）は誕生から死、さらには死後の世界にいたる人間の魂の遍歴を、七大徳と七罪源の寓意が「人間」（Humanum Genus）の魂を争奪する様を通して描いている。 貪食に関しては、檜舞台に陣取るCaro（肉体）が「大食のもとで恵みを受けて私は成長した。だから彼はそれにふさわしく私の横に座しているのだ」(248行）と語り、Voluptas（快楽）は「酒を飲むやつは、墓穴でしおたれるのだ」（965行）と警告を込めた自己紹介をする。いよいよ悪徳たちが「人間」を攻撃し始めると、Gula（大食）は「上等の食い物と酒を注文しろ。あらゆる食い物を詰め込むんだ。断食なんかしたって天国は手に入らない。断食なんかする奴らは気違いだ。食っても飲んでも、罪にはならない。十字架にかけて、断食なんぞするな。」と唆す。(1148-55行）「大食」の対立概念にあたる「節制」（Abstinentia）は、「大食はナイフを用いずに人を殺し、顔色を悪くさせる。誰であれ食べ過ぎたり飲み過ぎたりする者は、破滅するのだ。アダムが罪に落ち、楽園を失ったとき、この罪が我々皆を争いへと導いたのだ。」(1617-23行）と「人間」に警告する。

『堅忍の城』では、悪徳と美徳による人間の魂の争奪戦の模様は言葉によって行われる。実際に人間が大食と飲酒におぼれる場面はない。悪徳も美徳も、それぞれが寓意として果たす役割を語ればよいのである。アクションもまた寓意的になされる。七罪源と交わる「人間」が犯した罪を後悔し始めるのは、「改悛」が「良心のうずき」(point of penaunce 1377行）という槍で「人間」を突くという所作で行わ

れる。「堅忍の城」を包囲した悪徳たちに対して、美徳たちはイエスの受難を象徴する「この香しくやさしいバラ」（rosys swete and softe 2145行）を投げつけて撃退するのである。

16世紀のインタールード

後期インタールードになると、死後の世界までをその範疇におさめた悪徳と美徳の寓意は、現世の生活を直接左右する社会的問題へと変化する。根底にはいかに正しいキリスト教徒として生きるかという大前提がありながらも、視線は日々の暮らしに直接的に大きな影響を与える社会と経済の動きに向けられていくようになる。

作者不詳の『現世と幼児』（*Mundus et Infans*, c.1508）は、まだ道徳劇の枠組みを色濃く残し、登場人物はすべてアレゴリーという、初期インタールードとも呼べる作品である。主人公の「幼児」（Infans）は成長の度合いにしたがって、「児戯」（Dalliance）、「奔放」（Wanton）、「愛欲」（Lust and Liking）、「成人」（Manhood）、「恥」（Shame）、「老年」（Age）、そして「改悛」（Repentance）と名前が変わっていく。悪徳のひとり「愚行」（Folly）が酒を勧めるのは「成人」に対してである。（J.S. Farmer, ed., *Six Anonymous Plays*, 1st series, 1966.訳は筆者による）

Folly: Ah, ah, sirs, let the cat wink,
For all ye wot not what I think,
I shall draw him suche a draught of drink,
That Conscience he shall away cast.
Have, master, and drink well
And let us make revel, revel,

愚行　おやおや、観客の皆さん、目をつぶっていてくださいよ、
私が何を考えているか、解らないでしょう。
こいつに酒を一杯引っかけさせて、
「良心」なんか放り出させてやりますよ。
どうぞ、ご主人、たんと飲んでください、
そして、面白おかしくやりましょう。

「愚行」は酒を飲ませて、「成人」に「良心」のことなど忘れさせようとしているのだ。「愚行」に取り込まれた「成人」は「良心」に見つからないように名前を「恥」（Shame）に変え、どんちゃん騒ぎをするためにロンドンに向かう。

作者不詳の『青年』（*Youth*, c.1514）において「放蕩」（Riot）が主人公の「青年」にさまざまなカードゲームのみならず、酒を飲むことを教えてやるという台詞があるが、実際の飲酒の場面は無い。R. Wagerの『馬鹿は死ななきゃ直らない』（*The Longer Thou Livest the More Fool Thou Art*, c.1559）では「不節制」（Incontinence）が主人公の「愚鈍」（Moros）を歓楽街に誘う台詞があるが、これも舞台上では演じられない。

舞台上に酔っぱらいの姿が見られるのは作者不詳の『富裕と健康』（*Wealth and Health*, c. 1554）とUlpian Fulwell作の『類は友を呼ぶ』（*Like Will to Like*, c.1586年）である。登場する飲んだくれの名前はどちらも「ハンス」である。『富裕と健康』においてはオランダからの移民という設定であり、『類は友を呼ぶ』では、おそらくグロスター訛りを駆使する田舎者である。

『類は友を呼ぶ』のハンスは以前は学者だったが酒場の主人のTom Tosspotと知り合ったばかりに道を誤った飲んだくれである。alehouseに足を踏み入れたことが身を持ち崩

す第一歩となったのだ。（J.S. Farmer, ed., *Lost Tudor Plays*, 1966.訳は筆者による）

Haunce: Iche le le lernd zome la la latin when iche was a la la lad:
Iche ca ca can zay Tu est nebulo, iche learnd of my my dad.
And iche could once he he help the p p preest to to zay mas
By gis ma man iche ha bene co co cunning when twas.
Tom: I knew Haunce when he was as he saith:
For he was once a scoler in good faith.
But through my company he was withdrawn from thence,
Thorowe his riot and excessiue expence.
Unto this trade whiche now you doo in him se:
So that now he is wholy addicted to followe me.

ハンス　お、俺はよ、ラ、ラ、ラテン語をガキの頃にちっとばかり齧ってよ、
Tu est nebulo とか、い、言えるんだぜ、お、親父に習ったんだ。
ミ、ミサをて、手伝ったこともあ、あるんだ。
む、むかしはか、か、賢かったんだ。
トム　昔のハンスを知ってるよ。
昔は学者だったんだ、本当だぜ。
ところが俺と知り合いになって、学業とはおさらばさ、
どんちゃん騒ぎと浪費のせいだ。
いまじゃあ、このていたらくさ。
すっかり俺から離れられなくなっちまった。
（520-29行）

『富裕と健康』のハンスはオランダ語訛風の戯言を吐き散らしながら登場する。編者のFarmerによれば、彼の台詞は作者が適当にでっちあげたデタラメなオランダ語とドイツ語の混ぜ合わせで、ほとんど意味不明である。かろうじて判別できるのは射撃手としてイングランドに雇われたいと思っているらしいことである。興味深いことに酔っぱらいのハンスは悪徳を代表する「悪意」（Ill-Will）と「奸知」（Shrewed Wit）からも敬遠されている。「奸知」はハンスが登場すると、「あんな酔っぱらいのオランダ野郎がいたんじゃ、仲間割れしてしまう」と素知らぬ振りをするのである。

酔っ払いのハンスが外国人という設定になっていることは、当時の社会に広まっていた外国人排斥の風潮を反映しているのであろう。Robert Wilson作と考えられている『行商人の予言』（*The Pedlar's Prophecy*, c.1561-63）にも社会不安を増大させる外国人への嫌悪感が強く表明されている。(12) 興味深いことに、ロンドンで最初にホップを用いたビールの醸造を始めたのはオランダ人とドイツ人であったし、1585年にはロンドンのビールの醸造所の半数は外国人の経営によるものだった。(13) ハンスのオランダ・ドイツ訛りの戯言は、笑いを誘うものであったろうが、その反面、外国人の流入に脅威を感じていた人びとにとっては、苦い味のするものであったに違いない。

道徳劇の構造を残すインタールードでは、悪党たちは最後には滅びる。W. Wager作と考えられている『腹八分目医者いらず』（*Enough is as Good as a Feast*, c.1570）では、悪魔が悪党の誘いに乗って肉欲の生活を送った「俗人」（Worldly Man）の死体のそばで教訓を述べる。（R.M. Benbowed. *Regents Renaissance Drama Series*, Lincoln, U of Nebraska P, 1967.訳および下線部は筆者による）

Satan: O, O, O, O -- all is mine, all is mine.
My kingdom increaseth every hour and day.
O, how they seek my majesty divine;
To come to me they labor all that they may.
....
<u>An abominable drunkard</u>, a stinking lechere,

A filthy sodomite, a corrupt conscience within,
A privy slandere, and a subtle murderer:
To be short, a very dunghill and sink of sin.
....
Spare not, nor care not, what mischief you frequent,
Use drunkness, deceit, take other men's wives,
Pass of nothing -- one hour is enough to repent
Of all the wickedness you have done in your lives.

悪魔:　俺の物だ、全部俺の物だ
俺の王国は一時間ごとに、一日ごとに増えていく。
皆が俺の権威にすがりつき
なんとか俺の元へ来ようと汗水垂らす。
（中略）
忌むべき飲んだくれ、鼻持ちならない好色漢
汚らわしい男色野郎、腹の中では良心が腐り果て
陰で悪口雑言、ずる賢い人殺し、
要するに、まさに糞の山、罪の掃きだめだ。
（中略）
どんな悪さをしても、気に患うな
飲んだくれろ、嘘をつけ、他人の女房を寝取れ。
あらゆることをしてしまえ、一時間もあれば
生きてる間の悪事を後悔するには十分だ。

インタールードは、七罪源を社会に害を与える罪として描いている。七罪源はアレゴリーとして単独で存在するのではなく、生身の人間の中で他の罪と組み合わさって存在するようになっているのだ。

教育による罪の回避

聖職者たちは神が示した道から外れないことだけが神の怒りを回避する方法だと警告する。道から外れたものには、Wardが挙げたような悲惨な結末が待っているというのである。しかし、宗教的な警告が繰り返されること自体、それらの警告が効果を失っている証拠である。信心に訴えることでは、飲酒をやめさせることはできなくなっているのだ。そこで新たに、教育によって罪を犯さぬように子供たちを育てることが提案されるようになる。

教育問題に関する著作から例を挙げておくと、Thomas Eliotが『為政者』（*The Boke named the Governour*, 1531）に一章をもうけて、「不適切な飲食がどのような害を人々に与えているかは、日常の体験から教えられていることだが」と前置きして、リューマチ、痔瘻、浮腫などの症状に加え、魂も人体も醜く嫌悪すべき形に変えてしまう飲酒の害を説いている。（Book III, XXII, Of Sobriety in Diete）また、Roger Aschamは『学校教師』（*Schoolmaster*, 1570）の中で「酒場で飲食をすることは、恥ずべきことであるばかりか、若者にとっては罰せられるべきことである」（To eate, or drinke in a Tauerne, was not onelie a shame, but also punishable, in a yong man.）と言っている。

『類は友を呼ぶ』のトム・トスポットも、自分の破滅を他山の石とするように、教育の重要性を観客に呼びかける。

Tom: Oh all ye parents to you I doo say
Haue respect to your children and for their education:
Lest you answer therfore at the latter day,
And your meed shalbe eternall damnation.
If my parents had brought me vp in vertue and learning,
I should not haue had this shameful end:
But all licenciously was my vp bringing,
Wherfore learn by me your faults to amend.
But neither in vertue, learning, or yet honest trade,
Was I bred vp my liuing for to get:
Therfore in misery my time a way must vade,
For vicious persons beholde now the net.
I am in the snare I am caught with the gin:
And now it is to late I cannot again begin.

トム: 親御さんの皆様に言っときますよ
子供たちと教育に気を使いなさい
あとになって泣きを見て
報いが永遠の堕地獄にならないように。
俺の親が美徳と学問で育ててくれてたら
こんな恥知らずな終わり方はしなかったのに。
だけど俺は肉欲にまみれて育ったから
俺を見て、我がふりを直すんだな。
美徳も学問も、正直な仕事もなしで
生きていくように育てられちまった。
だから死ぬ時もみじめなもんだ。
悪党たちは「網」に気をつけな
俺は罠にかかってからめ捕られちまった
もう遅すぎる、やり直しはきかないんだ。

道徳劇においては、悪徳の誘惑に屈しても、人生の終わりに改悛することで救済を得ていた。しかしトム・トスポットの魂に救済が無いことは、本人が自覚している。罪の回避は、もはや人間一般ではなく、個人に限定されるものでもなく、親を始め社会全体が取り組むべき問題であるとの認識が生まれて来ているのだ。

終わりに

中世からチューダー朝イングランドにおいて、飲酒という罪を文学的作品を中心に概観した。聖書の記述の解釈は高度に神学的な内容であるが、それが説教やその分野の知識を持つ著作者の作品、さらには演劇作品を通して一般庶民の手に届くものとなる。七罪源は神学レベルでの解釈が求められると同時に、誰もが日常的に違反しうるレベルの罪である。飲酒という食生活とは切っても切り離せない行為にすら、神学的解釈は不可欠であり、神の怒りに触れる危険性をはらんでいたのである。飲酒は快楽に直結する行為であるだけに、キリスト教的世界観の中で生きていた人々にとっては、抜き差しならぬ問題であっただろう。ただ、これほどまでに政府やピューリタンの聖職者たちが躍起になっていたということが、皮肉にも一般の人々の飲酒という罪への関心の低さを表しているとも言えるのかもしれない。しかし、トム・トスポットの最後の言葉は、道徳劇に見られるアレゴリーとしての人間の言葉ではない。死後の魂の救済よりも、現実の世界での成長過程における親や社会の責任の重要性を訴えているのである。

世に現れる著作は、必ずしも一般大衆の本音を代弁するものではあり得ない。どのような罪であれ、それを避けるようにと警告する著作があれば、それはその罪が現実に犯され、社会に一定のインパクトを与えていることの証左だと解釈できるだろう。そうだとするならば、メディアとして少なからぬ影響力を持っていた演劇作品に現れる罪のあり方を考察することにも、価値はあるだろう。本稿をもって、チューダー・インタールードが描く罪の様相を総合的に考察する第一歩としたい。

注

（１）「創世記」3:6。St. John Chrysostom（c.347-40）は、アダムとイブが神の命令に背いて楽園を追放されたのも、ノアの時代に洪水が襲ったのも、ソドムの町が滅ぼされたのも「貪食」に対する神の怒りであると主張した。St. John Chrysostom, *90 Homilies On The Gospel According To St. Matthew* (in npnf1-10（Oxford 1851）- Edited by Philip Schaff 1888, Public Domain) For indeed both Adam by the incontinence of the belly was cast out of paradise; and the flood in Noah's time, this produced; and this brought down the thunders on Sodom. For although there was also a charge of

whoredom, nevertheless from this grew the root of each of those punishments. 一方、トマス・アクィナスは『神学大全』(*Summa Theologica*) の第百四十八問題「貪食について」において、アダムとイブが楽園を追放されたのは「傲慢」が理由であると述べている。トマスは、この罪を単なる飲食への欲望ではなく、理性によって規制されていない不適切な欲望であるとし、神の愛に背くという観点からすれば死に至る罪であるが、神の法に背かなければ、貪欲は小罪であると述べている。These punishments are to be referred to the vices that resulted from gluttony, or to the root from which gluttony sprang, rather than to gluttony itself. For the first man was expelled from Paradise on account of pride, from which he went on to an act of gluttony: while the deluge and the punishment of the people of Sodom were inflicted for sins occasioned by gluttony. (*The Summa Theologica of St. Thomas Aquinas*, Second and Revised Edition, 1920. Literally translated by Fathers of the English Dominican Province. Online Edition Copyright © 2008 by Kevin Knight. http://www.newadvent.org/summa/index.html)
教区牧師の説教はある程度アクィナスに準拠しているといえるだろう。

（2）翻訳では「ビール」となっているが、原文は 'ale' を用いている。一般的に酒は、エール、ビール、そしてワインが用いられていた。エールとビールは醸造法が違う。エールが最も安価で、ワインが最も高価であった。

（3）Richard L. Greaves, *Society and Religion in Elizabethan England*, U. of Minnesota Press, 1981. pp.483-85.　第七の戒律は、「姦淫してはならない」であるが、ピューリタンはこれを広く解釈している。

（4）飲酒と暴力、性的紊乱の包括的な情報は A.L. Martin, *Alcohol, Sex, and Gender in Late Medieval and Early Modern Europe*, New York, Palgrave, 2001.を参照。

（5）現存している刊本は、1583年のものが二種類、1584年、1585年付、1595年のものである。筆者が使用したのは、1583年5月1日付のファクシミリ版である。(Theatrum Orbis; New York, Da Capo Press, 1972)

（6）『針の上で天使は何人踊れるか』（ダレン・オルドリッジ著　池上俊一監修　柏書房2007年）22ページ以降参照。

（7）1523年にRicharde Bankysによって出版されている。筆者が使用したのは、ファクシミリ版である。Amsterdam, Theatrum Orbis; New York, Da Capo Press, 1973.

（8）この著作の時期には、現在標準的な聖書として用いられているいわゆる欽定訳聖書はまだ出版されていない。上記のエピソードは、広く知られているものであったろうから、必ずしも典拠を聖書とは限定できないが、著者が聖書を用いたとしたらおそらくそれはWyclif Bible（1380-88ころ完成）かTyndaleの聖書（1525年に完成）、あるいは405年に完成したラテン語のいわゆるVulgate聖書（トレント公会議の結果、1564年にローマカトリック教会の正式の聖書となる）であっただろう。いずれの聖書にもハムが笑ったという記述は無い。従って、著者は教父や思想家によって聖書に付された解釈を用いたと考えられる。

（9）なぜノアがハムを呪ったのかは、聖書解釈の大きなテーマの一つとなっている。アウグスティヌスは『神の国』XVI:2において、ノアが酔っぱらって裸になったことを、イエスが十字架にかけられたことの予兆（the nakedness of their father (which signifies the Saviour's passion) として解釈している。宗教改革の時代においては、ルターはノアの酩酊は擁護したが、ハムが笑ったことを父親への敬意の欠落として批判している。カナンが祖父ノアのペニスを丈夫なひもで縛り切断した、あるいはハムが息子のしたことを笑って二人の兄弟に告げた、さらにはハム自身が切断したなどという解釈もある。アフリカからの奴隷貿易が盛んになるにつれてノアの呪いを利用するようになるが、すでに13世紀には奴隷制度の由来としてノアの呪いが用いられている。Stephen R. Haynes, *Noah's Curse*, Oxford UP, 2002.また Don Cameron Allen, *The Legend of Noah*, U. of Illinois Press,

1963.を参照。

（10）前述のチョーサーは、「免罪符売りの話」において、明らかに堕落した教会関係者である免罪符売りに、酔いどれて鼻血を流しながら睡眠中に死んだアッティラを引き合いに出した飲酒批判を行わせている。

（11）John Chandos ed., *In God's Name* , Hutchinson of London, 1971.所収。飲酒批判を繰り返したWard自身が何回も過度の飲酒で失敗を繰り返している。Greaves, p.485.

（12）持参金がないので娘を結婚させられないと嘆く両親が、イギリス人の家系に誇りを持ち外国人とは結婚させない、そんなことをしたらイギリス人の血が汚れる、外国人のせいで礼儀作法までおかしくなっていると言う。また、職人は外国人が高い金で住居を借りるので家賃がどんどん高くなり、家を追い出されてしまうと不満を述べている。

（13）Peter Clark, *The English Alehouse: A Social History 1200-1830*, Longman, London, 1983, pp.31-32, 96-97.